

松山大学大学院言語コミュニケーション研究会

第 14 回例会 特別講演会

● 日 時：2019(令和元)年 12 月 20 日(金) 受付:17 時 40 分より

● 場 所：松山大学樋又キャンパス 2 階 H2A 教室

※伊予鉄市内電車環状線「鉄砲町」駅下車、徒歩約 5 分(松山市駅→鉄砲町駅約 20 分)

※大学ホームページ(<http://www.matsuyama-u.ac.jp/>)ご参照のこと

● 参加費：無料(学内外者問わず)

◆特別講演(18:00~19:30)

題 名：「庭園、語りあい、そして、手と手：ジョン・ミルトン作『楽園の喪失』とわたしたち」

司 会：新井 英夫(松山大学大学院教授)

講 師：野呂 有子(日本大学教授)

要 旨：みなさんは、17 世紀イギリスの文学者ジョン・ミルトンをごぞんじですか。『楽園の喪失』という作品タイトルを耳にしたことがおありでしょうか。

シェイクスピアなら知っているが、ミルトンというのは乳酸飲料のことかと思っていた、という方もおられるかもしれません。また、ミルトンの『失楽園』という作品なら聞いたことがある、という方もおられるでしょう。

ミルトンや『楽園の喪失』(『失楽園』というのは、同じ作品 *Paradise Lost* の別の日本語訳です)のことはあまりよく知らない、という方でも、じつは本作品の主題や重要なモチーフについては、それとは気づかないまま、実際には触れている、ということが多いのです。

たとえば、数年前に上演された実写版の『シンデレラ』の舞踏会に続くシーンを覚えておられるかたもいるでしょう。シンデレラと踊ったあと、王子さまはシンデレラを連れてお城の奥の庭園に行きます。そこには、薔薇が咲き乱れており、王子さまはシンデレラをブランコに乗せます。そして、ブランコをゆらしながら、王子さまはシンデレラに語りかけ、愛の告白をします。こうした場面はディズニーのアニメ版『シンデレラ』にはなかったはずですが、また、原作のおとぎ話の中にもありません。

英文学作品に詳しいかたなら、シャーロット・ブロンテ作『ジェーン・エア』をごぞんじでしょう。家庭教師となったジェーンはイギリスの田舎の大邸宅で領主のロチェスター氏に恋をします。そして、ついにロチェスター氏から求愛されますが、その場面は館の庭園でした。花が咲き乱れるこの庭園の描写について、英米や日本の多くの研究者の人々が、この庭は『楽園の喪失』でミルトンが描き出した「エデンの園」を想起させる、と述べています。

それにしても、21 世紀の実写版『シンデレラ』の監督や、19 世紀の女性作家ブロンテは、なぜ、愛の告白の場面を「庭」に設定したのでしょうか？ あらためて考えてみれば、これは不思議なことです。たとえば、バブル時代の日本の若者が愛の告白をする、というときは、高級フレンチレストランで、クリスマス・イブや、相手の誕生日と相場が決まっている、といわれていました。

今回の講演では、英米の映画や文学作品にしばしば認められる、『楽園の喪失』の影響についてお話ししながら、それが 350 年以上をへた現代に生きるわたしたちに対する励ましのメッセージをもっていること、そして、わたしたちに生きる力を獲得するヒントを与えてくれる、ということについてお話させていただきたいと考えております。

【特別講演講師紹介】

野呂 有子(のろ ゆうこ)

日本の英文学者。東京教育大学(現・筑波大学)大学院文学研究科修士課程修了。学術博士。東京成徳短期大学教授を経て、現在日本大学文理学部英文学科教授。17世紀英国で活躍した詩人、政治・社会・宗教思想家のジョン・ミルトンを中心に研究。日本ミルトン協会では、過去に運営委員や編集委員長を務める。最近の著書として『詩篇翻訳から『楽園の喪失』へー出エジプトの主題を中心として』(富山房インターナショナル、2015)がある。



【キャンパスマップ】

